

2019年度 9月修了 修士論文

スポーツドキュメンタリー番組成立の背景と取材対象競技

～1990年代後期からの取材対象競技と番組構成映像について～

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツマネジメントコース

5017A702-2

花野 剛一
Goichi HANANO

研究指導教員： 間野 義之 教授

目次

第1章	緒言	1
第2章	先行研究	3
	2-1 日本におけるスポーツ番組とその変遷	3
	2-2 メディアスポーツについての先行研究	3
	2-3 スポーツバラエティ番組の変遷と先行研究	4
	2-4 スポーツドキュメンタリー番組の変遷とその先行研究	5
第3章	研究の目的と方法	8
	3-1 目的	8
	3-2 方法①	8
	3-2 方法②	10
第4章	結果	13
	4-1 番組で取り上げられた競技の分類・分析	13
	4-2 インタビュー調査結果	18
第5章	考察	25
第6章	結論と課題	26
引用・参考文献		
謝辞		
資料①～④		

第1章 緒言

現代スポーツにおける3つの大きな柱となっている「する」「観る」「支える」活動。その基盤として様々なメディアを通じてスポーツを「知る」ことは、欠かせないものである。

スポーツ基本計画(2017)では「アスリートは、不断の努力の積み重ねにより人間の可能性を追求しており、その活躍や努力は人々に夢と希望を届け、チャレンジする勇気を社会全体にもたらす。また、トップアスリートが才能を開花させる過程で培われた技術や知識・経験、生き方は社会的な財産でもあり、それらは多くの人々にスポーツの魅力を広げ、社会に活力をもたらすものである。」と示しているように、大会や試合のみならずアスリートたちの切磋琢磨する姿を知ることが社会にとっても重要な要素なのである。

2019年4月現在、テレビメディアにおいては、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けて、NHKをはじめ民放各局はスポーツニュース以外でアスリートを取り上げるレギュラー番組を放送している。国民の注目を集める世紀のイベントに向けての機運醸成、また、アスリートたちの現在を記録し、大会本番に向けた映像データとしての活用も視野に入れた局内アーカイブス化の動きといえるであろう。

この流れの中で、メディアの果たすべき役割として、スポーツを「知る」ためのスポーツドキュメンタリーの必要性があげられる。一般に、スポーツを「知る」メディア活動としては、映像媒体ではニュース報道やメディアスポーツとしての試合中継が大きな割合を占めている。しかしながら、それらは「結果」や「現在」起きている状況のみを伝えるにとどまり、そこに至るまでにアスリート自身が培ってきた貴重な「プロセス」について言及しているとは言い難い。

例えば、今や国民的スポーツとして注目を集めるフィギュアスケートは、競技名自体にはfigures=図形、つまり「氷上における究極の身体コントロールを行い、より正確な図形を描く」という由来を残すものの、かつて競技の一部をなしていた「規定」と呼ばれた、課題の図形通りに正確に滑るコンパルソリーフィギュア (Compulsory figures) は、1990年をもって世界選手権などの大会からは廃止された。また、シンクロナイズド・スイミングがアーティスティック・スイミングと競技名を変えるなど、他の競技においても時代とともに競技規則・ルールの改定はとどまることを知らない。

2019年アジアで初のワールドカップ日本大会が開かれるラグビーにおいては、「商業主義を前面に、視聴者を意識したTV用の観て面白いラグビーへと、ラグビーの競技精神をも揺るがしかねない改正案が、プロ主導の中で次々に打ち出される結果となった」(野々村ら2005)ことや、バレーボールにおいては吉田(2003)が指摘するように「バレーボールのゲームの様相を大きく変えたといえるのが全セットラリーポイント制である。これもメディアを強く意識して試合時間の短縮を図り、1試合あたりの試合時間がある程度計算立てられることを目的としたもので、これによりTV放送などで途中打ち切り(あるいは編集

することで試合の結果が途中で分かってしまうなど）というようなことがあまり起こらなく」なった。こういった競技規則の変化は、スポーツをより魅力的に見せるための変化でもあり、時に戦術などスポーツそのものに変化を与えてしまうことがある。また、素材の開発などによる道具の進歩により、往時とは全く異なる次元の競技となっているものも少なくはない。陸上トラック競技では、シューズはもとより、ウェア、そして競技場のトラックでさえ改良が行なわれており、記録そのものの価値が全く同等のものとは言い難い状況であることは明白である。

現在に至る様々なプロセスを踏まえ、そして時代とともに変化していく状況を克服して、トップアスリートがその才能を開花させるに至った技術や知識・経験、生き方を知ることは、それそのものが形として残ることが難しいため、そのプロセスは知られずに失われがちである。しかし、実はそこにこそスポーツの素晴らしさである「挑戦」や「あきらめない」姿勢、「協力」や「尊厳」などが見られるのである。

現在、映像メディアが発達し放送の波が増え、デジタルメディア上でも多種多様な番組が制作されていく中で、スポーツの映像を残していくこと、特に、中継やニュースといった報道ではなく、検証・考察をしていくドキュメンタリー番組はスポーツにとっての重要な資料となる。しかしながら、スポーツドキュメンタリーについての概要やその内容について分析した研究はほとんど見受けられない。

そもそも一旦放送された番組を保存するという考えは、世界的にみても 1970 年代からようやく広がる。アメリカでは「放送博物館（テレビ&ラジオ博物館）」（1975 年設立）、フランスで INA（国立視聴覚研究所 1974 年設立）に番組のアーカイブスが整備され始め、日本では 1989 年の放送法改正による「放送番組センター」の規定が示されたのち、1991 年に「放送ライブラリー」が横浜に開設され、放送番組の一般公開が始まった。

しかし、当然のことながら放送番組全てを「放送ライブラリー」にて保存・公開しているわけではない。ただし、放送局自体は自局制作番組の保存をほぼ行っており、その文化的・歴史的価値を持った「記録」としての検証や研究を行う事は可能な状況にある。

2020 年開催の東京オリンピックに向けて、各放送局が期待のアスリートを取り上げた番組を制作し始めている現在、改めてスポーツドキュメンタリーの価値を明確にすべきと考える。本研究ではまず、中継主体のメディアスポーツとスポーツドキュメンタリーの違いとその変遷について、先行研究のレビューにより整理する。そして、本論では、1990 年代末から現在までのスポーツドキュメンタリー番組がどのような背景で始まり、定時・レギュラー化してきたのかを番組の制作者へのインタビュー調査により明らかにする。また、スポーツドキュメンタリー番組が取り上げた競技の傾向の変化について、各放送局のウェブから

番組データを集積し、量的な把握を行うとともに、番組の制作者へのインタビュー調査により取材対象決定の傾向と要因について分析を行う。また、いくつかの番組の内容分析を通して、構成される映像の分析を試みる。

第2章 先行研究

2-1 日本におけるスポーツ番組とその変遷

スポーツを取り扱った番組をスポーツ番組とするならば、それは3つに大別できる。1つは試合や大会を中継(録画)放送するスポーツ中継番組(メディアスポーツ)、2つ目はアスリートが本来の競技とは別に身体能力を競ったり、様々な経験を語るトーク番組といったスポーツバラエティ番組、そして3つ目は試合や大会を通しての挑戦や成長、挫折や苦悩を描いたり、その結果そのものを振り返りつつインタビューで構成したり、アスリートのパフォーマンスを科学的分析しその高い身体能力によって人間の可能性に迫るといったスポーツドキュメンタリー番組である。

テレビ放送開始以来、スポーツ中継は放送の中でも大きな位置を占めている。「NHKクロニクル放送番組表」(放送確定票)によれば、1951年12月28日以降、週末金曜と土曜に配信された実験放送において、最初に放送されたスポーツの記録は1952年年7月19日(土)午後3時30分から午後3時59分のフェンシングであった。ニュースや映画、音楽演奏、人形劇といった天候に左右されないスタジオからの放送を繰り返してきた中、1952年10月3日(金)午後3時から午後5時30分の長時間にわたる大相撲秋場所の実況放送が開始。1952年10月11日(土)午後0時から午後5時には、屋外からの中継として東京6大学野球リーグ戦・東京大学対立教大学、早稲田大学対明治大学の試合中継も始まった。同年12月7日(日)午後2時30分から午後4時には、機材にとってはより厳しい条件である冬の屋外から早稲田大学対明治大学のラグビーが中継されている。

1953年、NHKは本放送を開始し、同年8月には日本テレビ放送網も本放送開始。盛り場や駅、公園などには街頭テレビを設置し、群衆がプロレスやボクシングなどに熱狂した。スポーツ中継は大衆の娯楽として、現在で言うところのキラーコンテンツとして欠かせないものとなっていく。そして、現在に至るまで、中継を主体としたメディアスポーツはスポーツ番組の中で最も視聴率、スポンサー獲得に貢献できる番組となっている。

2-2 メディアスポーツについての先行研究

従来のスポーツ(する・観る)から派生したメディアスポーツは「A:従来のスポーツ(プレイヤー、組織、環境)+B:メディア+C:視聴者」をその構成要素として(早川 2005)、現代では主にテレビを介して、競技場・スタジアムと言う公共空間で行われるスポーツの試合や大会を、プライベートな私的空間に置いて観戦することを可能にした。

また、1990年代以降はインターネットの普及により、日本でもグローバルな情報を得ることができるようになり、日本の国内スポーツとは異なる、開かれた世界水準のスポーツを体感するようになる。特に1993年のJリーグの開幕においては、バブル経済による潤沢な経済状況を背景に、世界レベルの選手が次々と来日し多数参加することになった。また、メディア側自体もフジテレビのF1グランプリ関連番組の成功に見られるように、価値あるコンテンツとして世界のメジャースポーツの扉を開けていく。

こうして、より身近にスポーツを体感することができる現代、「日本では歴代の高視聴率10本のうち実に7本をスポーツ番組が占めている。インターネットの普及などでテレビを見る人が減ってきていると言われる今も、スポーツは高い視聴率を上げられるコンテンツ」(森田 2009)として、スポーツはますますその価値を上げてきている。

「マスメディアはその社会的影響力の大きさ、社会から付与された多くの特権に対する社会的な役割などから高い水準の公共性が求められていることは言うまでもない。メディアに公共性が求められ、そのコンテンツにもなるスポーツにも公共性が求められている以上、スポーツ番組にも当然公共性が求められて然るべきであろう。」(神原 2001)しかし、その視聴行動自体はメディア側の意図する情報、つまり「メジャースポーツ」や人気選手、人気チームといったものに集中し、メディアにとって最も重要な要素とされる視聴率を得るがための偏った番組の提供しか受けることが出来ず、いわゆるマイナースポーツは蚊帳の外に置かれている状況が続いている。

メディアスポーツ映像の分析は、神原直幸が『メディアスポーツの視点 疑似環境の中のスポーツと人』第3章スポーツ番組の映像 (2001)において、サッカー、プロ野球、箱根駅伝、大相撲、競馬のテレビ中継を詳細に分析しているが、スポーツドキュメンタリーについての研究としては展開していない。そして、視聴者である受け手側の捉え方に焦点を当てた、カルチュラルスタディーズ研究による文化的研究に収束している現状である。

2-3 スポーツバラエティ番組の変遷と先行研究

日本のテレビ各局でスポーツバラエティ番組というジャンルが認識され始めたのは、山本(2018)が指摘するように「1990年代後半である。そこから2000年前半から現在にいたるまで、様々な番組が誕生・開発されていった。」と言っていいだろう。1995年には様々な競技のトップアスリートたちが身体能力を競う「筋肉番付」(TBS)が放送開始。その後のスポーツバラエティ展開については大別して対決型、トーク型、VTR検証型といった3つの型が制作されており、「多様なスポーツバラエティ番組の登場によって、従来中継やスポーツニュースの中にしか登場しなかったスポーツ選手の露出は確実に増加」と指摘する。そして、「スポーツ／スポーツ選手がテレビの中に日常的に登場するようになった今こそ、「スポーツ選手のタレント化」という問題を考えるうえで、バラエティ番組を

研究の射程に据える必要性があるのではなかろうか。」という問いをもち、「スポーツバラエティ番組は、スポーツ発のアイデアとバラエティ畑の制作者らの表現力、そしてタレントや芸人が務めるMCという媒介者が相互に補完し合う構造の中で誕生し、一定程度の認知度を得て視聴者を掴み、出演者や競技、見せ方を時に変え、時に継承しながら発展してきた番組群」と示している。

2-4 スポーツドキュメンタリー番組の変遷とその先行研究

ドキュメンタリーという言葉自体は、document から類推されるように「ありのままに記録する」という意味があるが、映像ドキュメンタリーをめぐる言説において、事実をありのままに描くべきとする「客観的」立場と、制作者のメッセージを表明した「主観的」立場とで語られることが多く、一般的には前者を支持もしくは受容する視聴者が多い。しかしながら「事実ありのまま」を「客観性を持って」描くことが、果たして可能であろうか。

1953年にNHKの本放送が始まり、1957年には日本のテレビドキュメンタリーの創始と言える「日本の素顔」(1957-1963)がレギュラー放送開始。その後、1962年、日本テレビ(NTV)「ノンフィクション劇場」(1962 - 1968)がレギュラー放送開始。東京放送(TBS)「カメラルポルタージュ」(1962-1969)と、次々に新しいメディアでの表現が試され、吉田直哉(NHK)、牛山純一(NTV)、萩元晴彦・村木良彦(TBS)といった日本のテレビメディアをけん引していくことになる創り手たちが活躍した。いずれの番組においても、彼らによってスポーツを題材としたドキュメンタリーは作られていた。NHK クロニクルによると「日本の素顔」306本中、6本がスポーツを題材としたものであることが確かめられた(武田2012)。また、TBS「カメラルポルタージュ」では劇作家の寺山修司を構成に加えて、プロ野球や競馬、ボクシングなど多岐にわたるスポーツの世界を取り上げている。

現場にカメラが入り込みレンズ越しに「撮影」され、「編集」によって時間の流れの組み換えが行われ、「語り」というナレーションが番組を先導していく。そして、時に効果音が入り、情緒を喚起する音楽が挿入される。つまり、ドキュメンタリーには制作者であるディレクターの視点があり、彼の意図する構成によって、「物語」が表現されているのである。吉田直哉自身、「記録映画でもテレビドキュメンタリーでも同じですが、一番重要なのは制作者の意図ということでしょう。意図のない記録映画などというものは、あり得ませんし、あったとしてもおおよそとるに足らない愚作になります。」(吉田1953)と語っている。特に、勝負や駆け引き、人間性などが表出するスポーツは、まさにドラマチックな状況を孕む題材として、ドキュメンタリーにとって格好のテーマとなりえたのである。

1964年開催の東京オリンピックや高度経済成長とともに、テレビが日本全国の家庭に普及。プロ野球や大相撲でのなどの国民の娯楽としてのテレビ中継が隆盛を極めていく中、NHKは1976年4月から大型ドキュメンタリー番組である「NHK特集」の放送を始める。

そしてスポーツドキュメンタリーとして、8月に「我が青春の甲子園」、9月には「もう一つの大相撲」-地方巡業の記録-と、国民的スポーツである野球と、独占中継をしていた大相撲を取り上げて番組制作をしている。「NHK 特集」としての放送が終了する1990年3月までに総本数1378本中に258本のスポーツドキュメンタリーが制作されている。

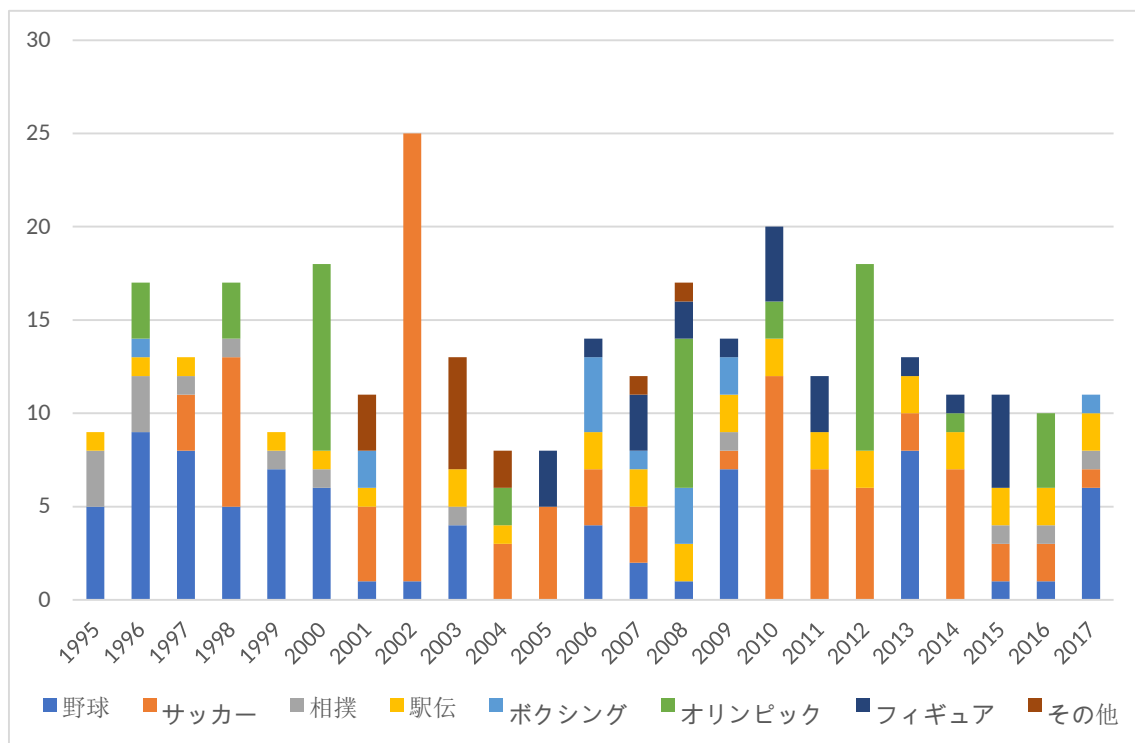
ちなみに、1980年4月にはスポーツ総合誌の先駆けとなる『Number』（文芸春秋）が創刊。沢木耕太郎とともに、ニュージャーナリズムの旗手として注目されていた山際淳司の「江夏の21球」が掲載され、1983年1月24日には同作品を映像化した「NHK 特集」が話題を呼び、スポーツドキュメンタリーの名作として多くのスポーツファンに記憶されている。なお、この作品はNHK番組公開ライブラリーにて視聴可能である。

1984年のロサンゼルスオリンピックで、商業主義が取り入れられ、一気に放送権料が高騰し、メディアスポーツが大きな力を持つようになったが、スポーツドキュメンタリーにおいては報道系の番組であるドキュメンタリーに組み込まれたままであった。

「NHK 特集」ではシリーズ「オリンピックの群像」としてアスリートを取り上げたドキュメンタリーを5本制作している。

そして90年代、バブル景気を受けて日本におけるスポーツの変革期が到来する。世界最高峰のカーレース：フォーミュラー1：F1グランプリにおいては日本企業の車の活躍と初の日本人ドライバー・中島悟の参戦、Jリーグの開幕など、野球以外のプロスポーツも活況を呈した。また、生活様式の多様化や1989年（平成元年）放送法の改正によりCS・BS本放送が開始されるなど多チャンネル化の時代が到来する。海外スポーツ中継、特にNHK-BSは、アメリカ・メジャーリーグ中継を当初から放送の目玉コンテンツとしていたが、1995年に野茂英雄がロサンゼルス・ドジャースに入団して日本のマスコミが予想していなかった活躍をしたこと、イチローや松井秀喜など人気選手のメジャー移籍が続いたことも相まって、長時間中継を始めとした視聴環境の多様化に伴い、スポーツコンテンツが多く編成されるようになった。

ビデオリサーチの「年間高視聴率番組30（関東地区）」によると、1995年から2017年までの間、スポーツ番組の占める割合は高く、国民の生活にとってスポーツへの関心の強さがうかがえる。スポーツ番組の数が多い年には世界的なスポーツイベントが開催され、その中継番組が高視聴率を獲得していることがわかる。また、特定の選手が活躍する大会の開催も各年ごとに注目競技が変わっている要因であることが判明した。



グラフ1 視聴率上位 30 位以内 競技ごとのスポーツ番組数 (1995 年～2017 年)

※ビデオリサーチの「年間高視聴率番組 30」のデータをもとに花野が作成

各年の開催イベント及び特定の選手が活躍した大会

1996 年：アトランタ五輪	1998 年：長野五輪
2000 年：シドニー五輪	2001 年：世界陸上
2002 年：サッカーW杯日韓共催	2003 年：世界陸上
2004 年：アテネ五輪	2005 年：女子フィギュア各世界大会（浅田真央）
2007 年：世界フィギュア東京大会	2008 年：北京五輪
2009 年：ワールド・ベースボール・クラシック	
2010 年：バンクーバー五輪	2011 年：サッカー アジア杯
2012 年：ロンドン五輪	2013 年：ワールド・ベースボール・クラシック
2014 年：ソチ五輪	2015 年：フィギュア グランプリ・ファイナル
2016 年：リオデジャネイロ五輪	2017 年：ワールド・ベースボール・クラシック

このような時代背景を受けてついに 1998 年、テレビ朝日において「GET SPORTS」がスポーツドキュメンタリーのレギュラー番組の口火を切る形でスタート。翌年には、TBS において「ZONE」（現在「バース・デイ」として継続）がスタートする。こうして、スポーツドキュメンタリーとして取り上げられる競技・種目やアスリートの数は増えていく。

スポーツそのものをより深く「知る」ための番組であるスポーツドキュメンタリーを対象とした研究は 1996 年アトランタ・オリンピック、そして 2000 年シドニー・オリンピック

女子マラソンの選考過程やアスリートを取り上げた NHK「にんげんドキュメント」「NHK スペシャル」を題材にし、感動を喚起する「物語」という視点から論じた論考が挙げられる。

「私たちは実況中継を視た後で、その試合を題材としたドキュメンタリー番組に接することがある。またそれとは逆に、ドキュメンタリーを通じてある選手やチームについて知り、後から彼ら／彼女らの活躍を実況中継で目の当たりにすることもある。」「つまり、私たちがテレビを介してスポーツを見る／知るという日常的なメディア体験は、スポーツ実況とスポーツ・ドキュメンタリーの相互影響作用のうえに成り立っている」（阿部 2008）ことは誰もが当たり前のように受け入れている体験なのであり、スポーツドキュメンタリーがコンテンツとして求められていることがうかがえる。

そして、臨場感や緊張感、同時性で視聴者に興奮と感動をもたらすスポーツ中継と、それらを欠いたコンテンツであるスポーツドキュメンタリーの違いを、阿部は「物語性に起因している」と指摘している。「スポーツの実況中継は、一方で人びとを大いに熱狂させる可能性を持つと同時に、他方でなんらの面白みも感じさせない危険性を内包して」いるが、本稿 2-3 で既に論じたように、制作者の意図によって紡ぎだされるドキュメンタリーは「あるテーマ設定をしたうえでそれに関係する様々な要素を加え」て、『どのような感動を引き起こすか』を周到に準備でき」「人びとに大きな感動を与えるべく『物語』を仕立てる余地が、実況に比べてより多く与えられて」いるのである。阿部の研究はスポーツドキュメンタリーを「感動を喚起する『物語』の文法」として考察しているが、彼以外にもスポーツドキュメンタリーを俯瞰して、特に、定時・レギュラー番組としてのスポーツドキュメンタリーがどのような背景で始まり、また、その取材対象競技がどのような傾向にあるかという観点に迫った学術的研究は存在しない。

第3章 研究の目的と方法

3-1. 目的

本研究ではスポーツドキュメンタリーを俯瞰して捉えることを目指し、日本のテレビ史においてどのような背景で始まり、現在に続いているかを明らかにする。特に 1998 年以降、各局でスポーツドキュメンタリーが定時・レギュラー番組として放送を始めた際の背景を明らかにする。また、各番組の取材対象競技の傾向と決定要因、及び構成される映像の特徴についても分析を行う。

3-2. 方法①

研究の対象であるスポーツドキュメンタリーは既に放送されたテレビ番組である。放送

局内には自局で放送された番組を保存するアーカイブが整備されつつあり、番組情報については、各局・番組ごとのホームページなどで検索・取得できる。今回の研究では各局のホームページを基本にし、以下の7番組についてアーカイブに残されている資料、そして、インターネットで取得できる情報を加えた。

◇NHK（日本放送協会）の4番組 <https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/index.html>

「NHKスペシャル」 <http://www6.nhk.or.jp/special/index.html>、

「にんげんドキュメント」

「スポーツ大陸」

「アスリートの魂」 <http://www4.nhk.or.jp/tamashii/3/>

◇TBS（東京放送）の2番組 <http://www.tbs.co.jp/>

「ZONE」

<https://web.archive.org/web/20050909080745/http://>

www.tbs.co.jp/zone/onair/2004/index-j.htm

「バース・デイ」 <http://www.tbs.co.jp/birth-day/>

◇MBS（毎日放送）の1番組 <https://www.mbs.jp/>

「情熱大陸」 <https://www.mbs.jp/jounetsu/past/>

分析する項目としては取材競技の種類と回数、男子・女子・パラアスリート・コーチおよびスタッフその他の登場回数とした。また、ビデオリサーチが公表している年間高視聴率データを用い、メディアスポーツとしての人気競技種目との関連についても分析する。

定時・レギュラー番組成立の背景や番組構成などについては、番組制作者および出演者へのインタビュー調査を行った。

一方、「放送と通信の融合」に伴って、放送後の番組の視聴機会は生まれてきたものの、課金システムによるネット配信視聴サービスなど限定的で、特定番組の選定についてはリクエストができないのが現状である。

そこで、視聴番組選択については、一般に公開されているNHK番組公開ライブラリー（NHK放送技術研所内）、公益財団法人放送ライブラリー、執筆者自身が録画しておいたVHSテープ・DVD、番組制作担当者から協力を得て入手したDVDを用い、視聴可能な番組から番組を構成する映像の傾向を読み取ることとした。

◎視聴した番組 72 本は以下の通り。

- ◇「NHK スペシャル」 33 本（「NHK 特集」 5 本を含む）
- ◇「にんげんドキュメント」 2 本
- ◇「スポーツ大陸」 3 本
- ◇「アスリートの魂」 6 本
- ◇「情熱大陸」 9 本
- ◇「ZONE」 4 本
- ◇「バース・デイ」 12 本

◎視聴番組中 3 回以上登場したアスリートやスタッフは以下の通り。

羽生結弦-7 高橋尚子-7 錦織圭-6 鈴木桂治-4 浅田真央-4
村田諒太-3 内村航平-3 イチロー-3 田中将大-3 なでしこ JAPAN-3
ディープインパクト-5 東北楽天ゴールデンイーグルス-4

3-2. 方法②

分析調査した番組のうち「情熱大陸」、「ZONE」、「バース・デイ」ならびに「にんげんドキュメント」については、各番組の立上げに関わった制作担当スタッフに、番組成立の経緯、番組の方向性・特徴、取材方法などについてあらかじめ送っておいた質問票を基に半構造化インタビューを実施した。さらに、現在制作中の番組「アスリートの魂」についても同様に制作担当スタッフに半構造化インタビューを実施した。そして、複数の番組に出演したアスリートとして、アテネオリンピック・柔道 金メダリストの鈴木桂治氏にインタビューを行った。

[インタビュー対象者]

a. 制作者インタビュー

表1 制作者インタビュー対象者 ※取材日時

番組名	初回放送日時・局・時間尺	氏名・肩書	担当時の役職
アスリートの魂	毎週（土）0：00 NHKBS 45分	中島慎治 NHK報道局 スポーツセンター スポーツ番組部 チーフプロデューサー	チーフプロデューサー
ZONE → パース・デイ * 番組名変更	毎週（土）17：00 TBS 30分	菊野浩樹 TBSスポーツ局 スポーツ番組制作部 部長	総合演出 総合演出兼 プロデューサー
情熱大陸	毎週（日）23：00 MBS 30分	河村盛文 MBS企画 代表取締役 社長	プロデューサー
にんげんドキュメント	毎週（木）21：15 NHK総合 50分（基本）	中村直文 NHK報道局 社会番組部	ディレクター
NHKスペシャル	毎週（日）21：00 NHK総合 50分（基本）	プロデューサー	ディレクター 兼 プロデューサー

B. 出演者インタビュー

表2 出演者インタビュー対象者

出演番組名	氏名・肩書	出演時の役割
情熱大陸 NHKスペシャル スポーツ大陸（NHK）	鈴木桂治 柔道家	取材対象アスリート （アテネオリンピック 金メダリスト）

[インタビュー項目]

a. 制作者インタビュー

- ・テーマ選択基準の有無

- ・取材期間
- ・制作スタッフ(担当部署、外部制作会社など)
- ・制作予算
- ・他番組との連動
- ・放映権を持つスポーツイベントに関連する制作
- ・他局、他波（BS，CSなど）との連動
- ・今後の展開（2019年・2020年関連）
- ・制作における課題

＊事前に送付した質問票については、資料④を参照のこと。

.b. 出演者インタビュー

鈴木桂治（アスリート）

- ・取材依頼の経緯
- ・取材期間、密着の度合い
- ・取材に対する正と負の面(ストレスなど)
- ・番組による違い
- ・放送内容について
- ・取材時の精神状態について

○インタビュー日時 2017年12月15日から12月29日

○インタビュー場所 都内各所(NHK局内、収録スタジオなど)

○収録機材：オリンパス Voice-Trek V-72 並びに iPhone 6

第4章 結果

4-1 番組で取り上げられた競技の分類・分析

1976年4月から現在（2018年3月）まで放送された8番組について、番組タイトルおよびサマリー（WEB上に存在しているもの）を閲覧し、総制作本数を集計した。（また参考までに、大まかなテーマ別の本数も集計している。）

表3 番組タイトル閲覧リストー NHK

放送期間	1976/4-1990/3	1990/4-2018/3	2004/4-2011/3	2000/4-2007/3	2011/4~2018/3
番組タイトル	NHK 特集	NHK スペシャル	スポーツ大陸	にんげんドキュメント	アスリートの魂

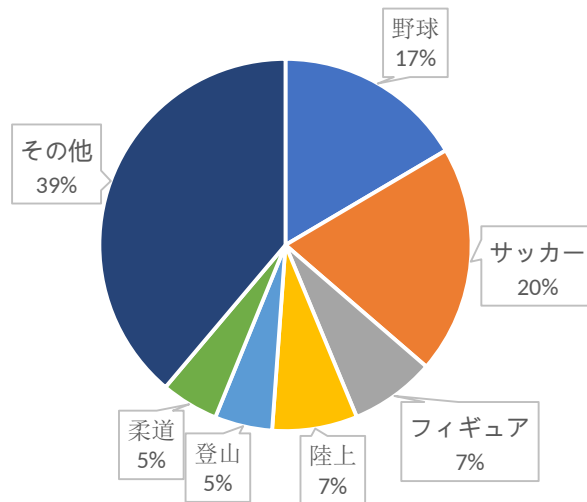
総制作本数(再放送除外)	1001	3328	272	281	210
スポーツ関連制作本数	58	121	272	62	210
内) 女子アスリート関連	3	19	54	13	74
パラアスリート	0	1	2	5	15
指導者・監督	3	3	13	4	0
上記以外のスタッフ等	0	0	0	4	0
経営・ビジネス	2	6	0	0	0
身体科学・技術	1	21	0	0	0

表4 番組タイトル閲覧リスト TBS・MBS

放送期間	1998/4～2018/3	1999/10～2004/9	2005/4～2018/3
番組タイトル	情熱大陸	ZONE	バース・デイ
総制作本数	995	219	612
スポーツ関連制作本数	245	212	572
内) 女性アスリート関連	58	32	108
パラアスリート	8	2	6
指導者・監督	18	10	19
上記以外のスタッフ等	3	0	0
経営・ビジネス	1	0	0
身体科学・技術	0	1	0

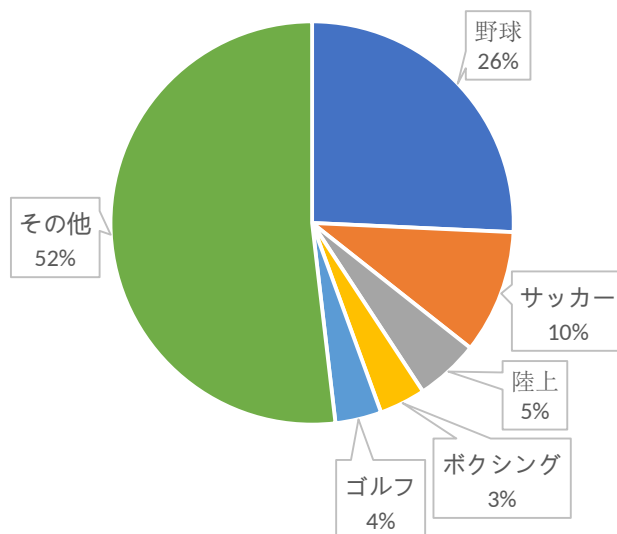
次に上記の中から 1998 年以降の番組内容に限定して、各回で取り上げられた競技に関する集計を行い（資料①参照）、番組ごとに上位 5 競技に注目してグラフを作成した。

NHKスペシャル



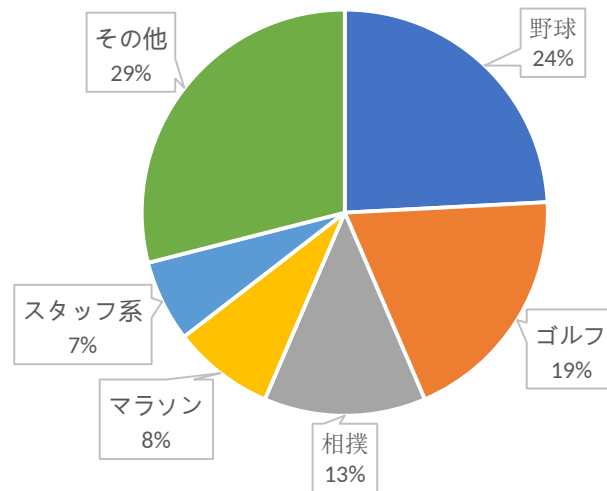
グラフ 2-1 競技の登場比率「NHK スペシャル」

スポーツ大陸



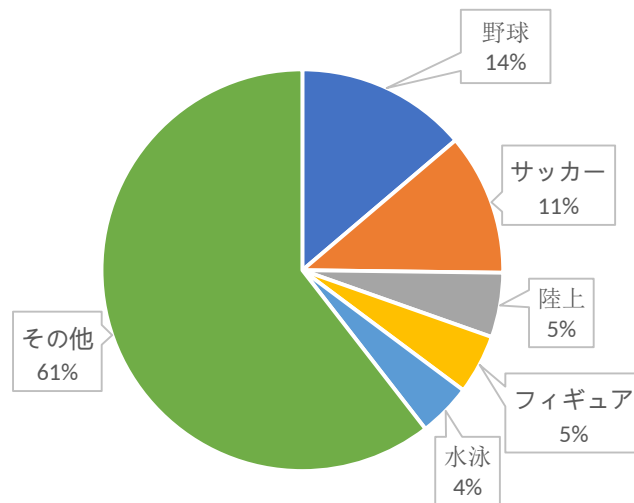
グラフ 2-2 競技の登場比率「スポーツ大陸」

にんげんドキュメント



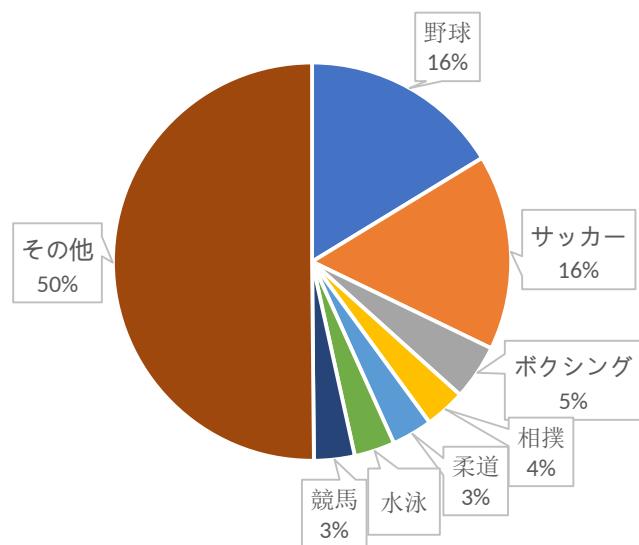
グラフ 2-3 競技の登場比率「にんげんドキュメント」

アスリートの魂



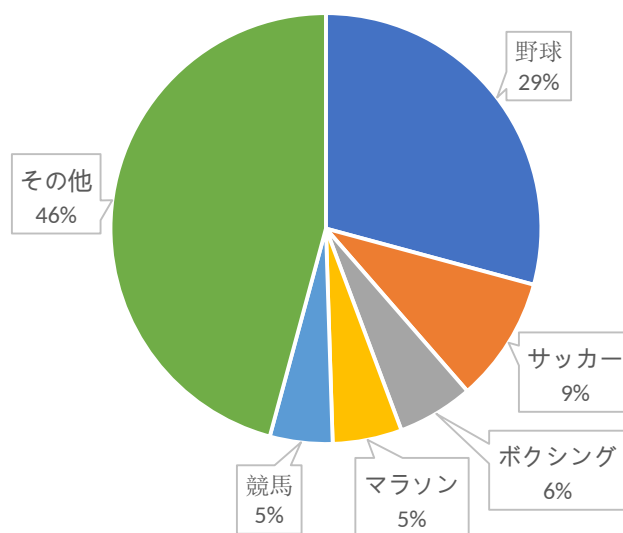
グラフ 2-4 競技の登場比率「アスリートの魂」

情熱大陸



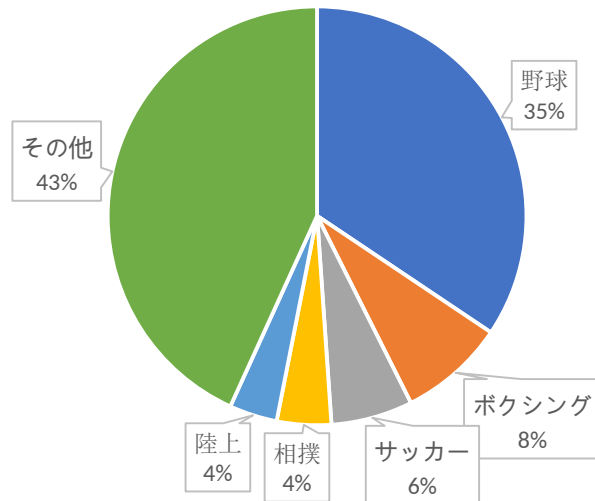
グラフ 2－5 競技の登場比率「情熱大陸」

ZONE



グラフ 2－6 競技の登場比率「ZONE」

バース・デイ



グラフ 2-7 競技の登場比率「バース・デイ」

その結果、どの番組も野球とサッカーが上位 1・2 位を占めていることが分かった。また、各番組の特徴も明らかになった。

「NHK スペシャル」でサッカーが 1 位であるのは、J リーグの開幕以降、ワールド・カップへの出場や 2002 年に日韓大会が開催されたことによって、サッカーが野球をしのぐ国民的スポーツとして注目を集められていることがわかる。また、近年のなでしこジャパンの活躍も大いに影響しているといえる。また、3 位にフィギュアスケートが入っているのは、浅田真央や羽生結弦といった国民的スター選手がオリンピックの前後に取り上げられているからである。（参照：「NHK スペシャル」番組ホームページ）

「にんげんどキュメント」で注目されるのは、プロのアスリートのみならず、アマチュア選手やコーチをはじめとするスタッフも取り上げられていることである。スポーツ専門の番組ではないこと、勝負を描くばかりでなく、ヒューマンドキュメンタリー番組であることが取材テーマの範囲を広げている。

（参照：資料①「競技合計表」）

「スポーツ大陸」と、その後継番組である「アスリートの魂」は本来 BS の番組であり野球、ゴルフ、ボクシングといった比較的年齢層が高い男性が好んで視聴する競技が取り上げられている。「アスリートの魂」は 2011 年にスタート（地上波）し、女子選手やパラ競技などを常に一定の割合で取り上げている。2011 年は東京がオリンピック開催に立候補表明した年であり、国民の中に再び夏季オリンピックを日本でと言う期待が高まることを予想しての番組立ち上げてあったのだろう。メジャー競技に限らず、オリンピックで行われる

各種のマイナー競技も取り上げて、他の番組には類を見ないバリエーションに発展している。特にパラ競技の広がり注目している。

(参照:資料①「競技合計表」 :資料②「年度別登場競技(種目)表」)

「ZONE」・「バース・デイ」はTBSが放映権を持つ世界陸上やボクシングなどを積極的に取り上げている。また、プロ野球選手については、ピークを過ぎた”戦力外通告”を受けた

選手を取材し、スピン・オフとして特別番組を制作・放送している。

(参照:資料②「年度別登場競技(種目)表」)

「情熱大陸」はTBS系列であるMBS毎日放送の番組である。ドキュメンタリー番組として放送開始から20年を経た国民的な番組といえる。スポーツ専門ドキュメンタリー番組ではないが、アスリートを取り上げた割合は30%を超えている。アルコール飲料会社がスポンサーであるために未成年はラインナップできないが、時代のイノベーター(変革者)を取り上げることを番組コンセプトに掲げており、女子アスリートやマイナースポーツを積極的に取材している。

(参照:資料①「競技合計表」)

筆者自身が視聴した番組から、番組を構成する映像を分析し、次のように分類した。

- A. 試合・大会・トレーニング映像…アスリートとしての映像、周囲の証言も含む
- B. 過去の映像…アスリートの成長過程や特徴を紹介する映像
- C. ヒストリー…プライベート映像、競技とどう向き合ってきたかのドキュメント
- D. インタビュー…A、B、Cに含まれるが、アスリートの競技外のオフショット

※資料③番組構成表をもとに

4-2 インタビュー調査結果

a.制作担当者インタビュー結果

① 「情熱大陸」初代プロデューサー 河村盛文氏

2018年4月で放送開始20周年の番組である。ヒューマンドキュメンタリー番組として国民的番組となっているが、これまでに多くのアスリートたちを取り上げている。その特徴は、メジャースポーツよりも、マイナースポーツのアスリートを取り上げていることである。

・番組企画成立の背景

メインスポンサーであるアサヒビールに対して、あらゆる世界の“イノベーター=変革者”を取り上げる番組としての提案をしたことが要因であった。

「マスコミから取り上げられないようなマイナー競技でも、世界に挑戦しているアスリートや、男子しかなかった種目でも、果敢に挑戦してる女子の先駆者たち。オリンピックでメダル獲れそうな競技ばかりをみんなが見るっていうのが、あれが気に入らない。どういう人がやって、どういう種目ですごい奥深いものがあるんだろうと。世の中的にもそれを見たいと言う人がいると思っていましたから。」

当時トップシェアを誇っていた麒麟ビールに対し勝負を挑んでいたアサヒビールにとっては、番組イメージとしてまさに合致するものだった。視聴率優先ではなく、企画優先。その結果が幅広いアスリートを取り上げることに繋がっていた。

・取材対象の決定要因

アルコール飲料メーカーが主たるスポンサーであることから、20歳という年齢制限があるものの、番組コンセプトに合致する取材対象であれば特に制限は設けていない。

「その縛りについては…ありますね。今のアスリートは10代で一度ピークを迎える人が多いので。ジャンプの高梨さん、もういい年になってきたんだなあと。伸びてないのは年取ったからまかなあと。進化が早いよね。『情熱大陸』のプロデューサーはスポーツニュースとか見ながら、こいつ行けるかなあと考えてるんだと思いますよ。20歳になるのいつかなあとか。本田真凜はまだまだでしょ？」

・撮影機材の小型化による制作体制

アスリートへの密着取材が特徴となっている当番組であるが、それは撮影機材の変化がもたらした結果であった。

「スポンサーにアサヒビール以外にスバルやマツダといった自動車メーカーがいるんですよ。移動の際に、どうしても他のメーカーは映せない。それでディレクターが助手席に乗ってホームビデオで撮影ってことになって。そういうことを逆手に取ってから、車の中だし、密閉空間で、やはり、ぽろんと気が緩んだり。結果的には密着取材を可能にしたんです。」

② 「ZONE」「バース・デイ」総合演出（当時） 菊野浩樹氏

スポーツドキュメンタリーのレギュラー番組として1999年に放送開始した。当時TBSは、木曜10時をドラマ枠に設定していたが、フジテレビのドラマが圧倒しており、視聴率は伸び悩んでいた。そこに、『筋肉番付』などのスポーツバラエティ番組をヒットさせていたチームが参画し、「ZONE」はスタートした。

・番組企画成立の背景

「編成局からすると当時ドラマ枠が多かったのを整理をするのか、数字も落っこちてきている中で、そこをつぶして営業枠で『ZONE』を作ってるんです。だから営業ありきなんです。それから、98年から始まったテレビ朝日『GET SPORTS』と『筋肉番付』の放送作家が同じだったのは大きいと思います。当時スポーツ局はで膨大な素材を無駄にしており、野球のキャンプの取材って1日ずっと撮ってるけれど、例えば、パ・リーグのロッテ戦のなんてほんとに30秒出れば良い方。でもずっと撮ってるんですよ。3時間も4時間も素材がある。これをなんとかもう少し活かしていけないかと言うところから始まったと言うのは聞いたことがあります。なるほどね！と思って。『GET SPORTS』はテレビ朝日のスポーツ局の思いが結集して出ている。『ZONE』はスポーツ局の亜流の人間たちが作っている。『筋肉番付』とか『スポーツマンナンバーワン決定戦』とか、スポーツバラエティーができる頃の話ですから。そこに番組と言う理論を持ち込んだのが当時のプロデューサーですね。自分たちで企画立てたりして作ろうと」

・番組の枠変更によって予算が左右され、取材対象・制作体制が変わる

民放は放送時間帯によって制作予算が変わる。当初「ZONE」は木曜日のプライムタイム（19:00-23:00）に放送されていたが、放送日と放送尺が変更となり、予算も削られていく。

「当初冒頭の30秒のシーンに、本編のVTR中で入れられないけれど、その後を予兆させるようなエピソードをスタジオで撮っていたんです。当時『ZONE』は一時間番組でしたから予算もそれなりに有ったんです。それが、日曜の夕方6時半から30分になりました。予算は減りましたが、まだスポンサーがついていたんです。問題はその後、『バース・デイ』となった時です。やっていることは全く同じなのに予算は半分です。深夜番組になっちゃったので。だから、『バース・デイ』の作り方として予算捻出のために、時々番組宣伝企画とかやらないとレギュラーとして維持できないんです。やはり、お金によって作り方も全然違いますね。『ZONE』の時はキャスティング力に大きなものを言わせて、例えば、清原和博などを取材していました。けれど『バース・デイ』になった時にお金の問題があり、そしてスポーツ局じゃなくなったので、独自のキャスティングをしていかないといけない。けれど独自のキャスティングってだんだんきつくなっていくんですよ、やっぱり。そうするとコンセプトは新人に行くか、落ちぶれたベテランに行くかとなって。人が目をつけてなくてブレイクする方向に行くのかあるいは、落ちぶれたと言うのは言い方悪いですけども1回ピークを迎えてそのピークを過ぎちゃってる人が頑張

っている。だから今の『バース・デイ』はやたらそういうのが多いです。」

菊野の発言に有るように、スポーツドキュメンタリーをレギュラー番組として続けていくために、自局が放映権を持っているイベントであるボクシングや世界陸上、ワールド・ベースボール・クラシックなどと連動したプロモーション企画を制作することや、視聴率を狙える企画、地味だけれど番組としてやりたい企画といったもので、ラインナップ・コンセプトを定めていた。今世間が注目している人よりは、ピークを迎えて、それを過ぎてなおひたむきに挑み続けているベテラン選手、もしくはまだ誰も知らない、しかしこれから台頭するであろう新人を取材するのである。その結果前者は、「バース・デイ」のスピン・オフとして、「戦力外通告」がシリーズ化されている。また、後者については新しい才能を発掘するにあたり、東京キー局にいては目の行き届かない地域の情報から取材対象が登場することになり、これまでになかった系列地方局との連携・協力を進める機会となり、番組の新たな可能性を示すことにつながっている。

また、レギュラー番組であるからこそ、一つの取材対象を何度も回数を重ねて放送することが出来、それが長期取材ともなり、また、ファンを獲得することにつながるなどの展開にも発展させられている。

③「アスリートの魂」中島慎治氏

・取材対象の決定要因

「ZONE」同様、若手の選手を積極的に取り上げる傾向がある。

「一番は視聴者にとって今一番見たい選手、有名選手がいいわけですね。ただ有名選手ほど取材のハードルは高い。大リーガーのダルビッシュ有だったりを見たいですけども、極めて取材の障壁は高いです。一方で若手の有望選手、まだ名前もそんなに知られていない選手、マイナーなスポーツ選手は取材の障壁はないので、ないがゆえに、非常に感動的なシーンが取れる確率も高い。そうすると、ストーリーラインやドキュメントの素材の力でこの選手こんなにすごいんだ！とそんなのが取れる確率が高い。名前が知られていなくても、この選手を応援したいなと思ってもらえる番組ができるかもしれない。そういうことをバランスとりながら、貴重な今だったら、密着して記録ができる、そういういろんな面で提案を採択しています。」

特徴的な点としては、NHK-BS1で中継放送されるスポーツと連動し、エクストリーム系のサーフィンやBMXなどのオリンピック種目となった若い世代に人気のスポーツアスリートを取り上げているところであろう。

「夏のオリンピックで新しい競技、若い人たちの需要を掘り起こす事と同じ考え方だ

と思いますね。例えばbリーグの番組が増えたり、あるいはサーフィンとかスノーボードとかスケボーとか、そういうのをあえて放送権高いの買って中継すると言うのは、確実にオールドファン以外の、野球とかサッカーそれ以外の若い人たちにリーチをかけるという戦略と言うのはあると思いますね。」

「若い人たちにリーチをかけると言うのもそうですし、スポーツ文化が広がると言うのも、従来の野球等の安定したスポーツだけではないところも積極的にやらなくてはいけない。日の丸を背負うとか、そういうところではないところに未来への可能性があったりすると、それで面白いなと思って、『アスリートの魂』でやる意義があるんだなと思いますけどね。」

『アスリートの魂』はBS1の番組なので、総合でやる時は再放送と言う扱いです。BS1の方からお金が出ていまして、BS1の編成とやりとりをしています。あるいは逆に、中継をやるから是非ここに放送日を設定させてくれとか、編成と情報交換を他のNHKの番組よりはよっぽど多いんじゃないかと思います。スポーツとしてどこが一番盛り上がるのか、その情報がないと、放送日は設定できません。」

また、NHKならではの「NHK スペシャル」など大型番組での連動も視野に入れて取材対象の決定も方針にあるという。

「2020年のオリンピックに向けて有望な若手選手とか『アスリートの魂』で取り上げていこうと思いますけれど、実際その2020年の前後に『NHK スペシャル』や大型番組で何本か放送することになると思います。けれどやはりその記録性と言う意味で、『アスリートの魂』で取材した選手が、例えば金メダルを取った、あるいは金メダルを取りそうだという時に、将来の大型番組に向けて記録をしていくと言う、そのアウトプットに意味もあるのかなと思っていますね。」

④ 「にんげんどキュメント」「NHK スペシャル」中村直文氏

中村氏自身は報道局に所属し、「にんげんどキュメント」の企画立ち上げに参加。両番組において、シドニーオリンピック女子マラソンのドキュメンタリーを制作。その後、世界のトップアスリートのパフォーマンスを最先端科学と最新技術で解明・映像化するスポーツドキュメンタリー番組「ミラクルボディー」シリーズを企画。

・取材対象の決定方針

「提案が通りやすいと言うところと言うとやはり知名度だったりタイミングだったり、オリンピックが来るとか、ワールドカップが来るかと言うの大きいですね。種目も人気競技かどうかと言うのも大きいかもしれません。たくさんの視聴者が関心のあるスポーツというのが優先され企画は取りやすいです。僕らがやりたいかどうか」

ていうのは別で、ポピュラーなということです。万人の関心が集まるスポーツが採択されます。『NHK スペシャル』で取り上げるのは、ほとんど金メダルに近いと言うのはやりますし、人気がある競技です。」

「僕としては人間の肉体の可能性を追求する番組を制作し、スポーツの社会的役割を広めたいと考えています。中継は、その瞬間を切り取りますが、それまでのアスリートの鍛錬や試行錯誤のプロセスがあって、その記録の達成や勝利が生まれるのですから。そのプロセスはドキュメンタリー番組こそが提示できると考えています。」

・撮影機材の小型化による制作体制

「2000 年当時ディレクターをやってるころ、デジカムが出てきてディレクター目線の映像が切り撮れるんです。もちろんカメラマンが撮らなきゃ撮れない映像もあるんですけど、さっきの距離感でいうと、近いんですけど、ちょっとざらついた感がある。そういったものが撮れだしたというのは僕らとしては映像表現的に大きかったなあと。当たり前ですけど大きなカメラの前でしゃべるのと、ちっちゃいカメラの前で思わず本音でしゃべるのとで全然違うと思うし。」

「マラソンの時に小出監督について回りましたけれど車内ではそつと漏らすあの一言がリアリティーがあって、表ではやっぱり高橋のインタビューがそうですけど、綺麗事しか言わない、表向きの言葉しか言わないので。ああいう言葉を切りとると言う意味では意識しましたね、映像もそうですけど。」

「僕はデジカメは音だとどちらかと言うと思っていたので、切り取れるのは。映像もちろん取れるんですけどあの近さでしか取れない音というのが、ブーム（※マイクを延長する機材）伸ばして録ってるって意識してしゃべらないって言うのが、本音がぼろっと出てくるありましたね。ドキュメンタリーは音が取れると言うのがナレーションとは真逆だと思うんですけどシーンで語れるということだと思うのですごい武器だなあと考えたのを覚えています。」

中村氏の証言からも撮影機材の小型化が番組制作において大きな変化を生んだことが明らかになった。ディレクター自身による単独密着取材や撮影スタッフが立ち入ることができない場所にカメラを据えての定点観測など、かつては撮影できなかった場所からの撮影が可能となった。また、記録メディアもデジタル化が進み、収録時間も大幅に拡張されている。このことで、取材対象に、より深く入り込んで新たな一面を映し出すことになっている。

b.出演者インタビュー結果

① 鈴木桂治氏 アテネ・北京オリンピック柔道代表。

「情熱大陸」、「NHK スペシャル」、「スポーツ大陸」に於いて取材され、ドキュメンタリーの取材が、自分自身を奮い立たせてくれる原動力になったと語る。「情熱大陸」では異例のアテネオリンピック代表選考とオリンピック出場時の2回取材されている。

・撮影機材の小型化による制作体制

番組本編中、鈴木氏がインタビューを受けるシーンでは、デジタルカメラを構えたディレクターが鏡に写り込んでいる。また、アテネオリンピックでは移動中や選手スタッフ以外は入場できない選手村内の様子を鈴木自身がカメラを回したいわばプライベート映像が映像素材として番組を構成している。

「ほんとに、週に3・4日一緒にいたので、それはそれで慣れました。朝玄関出たらディレクターが一人でカメラを構えていて、おはようございます、みたいな。その時、電車通勤、電車内から何から全部、飯食うとこまで全部一緒だったです。鬱陶しいと言うのはなかったです。逆に、仲良くなりましためっちゃめっちゃ。」

「情熱大陸」の2回目はアテネオリンピックでの様子を中心に構成されている。

「取材を受けた時点で、これは勝たなきゃならないなと思いますし、プレッシャーと言う言葉じゃなくて、やる気ですね。1つのモチベーションにはなりました。特に、『情熱大陸』1本目では康生さんと戦う以前に敗れてしまい、負けた姿がドキュメンタリーとして描かれたので。まず説明されたのは、2本目は凄く異例だと。それは自分に対する評価だと受け止めて、ありがたいことだなという気持ちで取材を受けました。1本だけだったら人間的な関係性も築けていないでしょう。負けて番組終わっているの。『情熱大陸』取材に来てたから負けたのかなって思ったり。プロデューサーには、そんなこと言わないでよおって言われますけど。2本目やってもらってよかったと思っています。」

「自分は勝った時負けた時どちらもドキュメントを撮ってもらっているんですけど、やっぱり、負けたときの方が何かしかり負けたことを中心に放送してくれてる。例えばオリンピック優勝した時の事は、もっとこんなことあったのに、とか。あれ、あそこ放送されないんだみたいな。未公開シーンが多いなど。そんな簡単に勝ってはいないんだけど…。簡単に勝ったように放送してくれるのも、こいつ強えなあ！と思ってもらえるからいいのですけれど、いや、もっと苦勞してるんだけど、俺・・・と。」

第5章 考察

本研究では、スポーツドキュメンタリーがどのように登場し、どういった競技（種目）を取り上げてテレビメディアの中に存在してきたのかを、主に 1998 年以降を中心に各放送局に残るデータや放送ライブラリーなどの映像アーカイブを用いて調査してきた。また、放送当時にそのスポーツがどのような評価を受けていたか、人気があったのかを知る一つの指標として、テレビ番組視聴率を参考にした。また、制作者へのインタビュー調査により、番組成立過程や、定時・レギュラー化の背景が明らかになった。そして、スポーツドキュメンタリーとメディアスポーツ（スポーツ中継）は連動しているという関係も明らかになった。

オリンピックやワールドカップといった世界的スポーツイベントは、メディアスポーツなしでは成り立たない。テレビ視聴率にその関係は現れており、年間高視聴率番組ベスト 30 では、毎年半数近くのスポーツ中継がランクインしている。特に、世界的スポーツイベントが開催された年は、上位を独占する状況である。スポーツドキュメンタリーが取材対象とするアスリートは、メディアスポーツによって視聴者の関心を集めたアスリートであるといえるだろう。

本研究で注目した 1998 年以降のスポーツドキュメンタリーにおいても、2000 年のシドニーオリンピック女子マラソンの高橋尚子、2002 年の男子サッカーW 杯サムライジャパン、2010・14・18 年と国民的人気スポーツとなったフィギュアスケート浅田真央、羽生結弦らは何度となく、そして長期にわたりスポーツドキュメンタリーの題材として取材され、いわば国民のヒーローでありヒロインとなっている。その例を挙げれば上げるほど、中継において高視聴率を獲得している競技種目そしてアスリートは、必ずスポーツドキュメンタリーとして取り上げられていることが明らかになったことを踏まえると、今後もスポーツドキュメンタリーはメディアスポーツにおいて取り上げられる競技種目・アスリート取材していくと考えられる。

その一方で、番組の予算、放送時間帯、番組コンセプトとの合致、放送波の種類、そして民放か NHK かといったそれぞれの事情によって取材対象の決定要因が異なることも分かった。それはある意味、特にレギュラー番組においては、その番組の個性となっていると考えられる。

また、スポーツドキュメンタリーがレギュラー番組として定着した背景には、撮影機材の小型化・デジタル化も大きな要因となっていた。

4-2 制作者へのインタビュー調査で明らかになったように、撮影クルー体制（カメラマンと音声、照明）を必要としなくなったことは、いつでもどこでも取材にフレキシブルに対応できる点や取材対象者との距離感を縮めるといった点で、より取材対象の内面に迫るこ

とが可能になり、また、制作予算の面でも大きな変化をもたらしたといえる。

鈴木桂治氏が取材された番組のうち、「情熱大陸」では、ディレクター単独取材による密着映像ならびに鈴木氏自身にカメラを預け、撮影スタッフが立ち入ることができないオリンピック選手村内の映像が本編映像の約 8 割を占めていることが示すように、撮影スタイルそのものが変わっていく可能性を示している。

また、ドローン撮影や多視点（自由視点）カメラによる収録といった撮影機材の進化や多様化は今後も続き、取材の可能性を広げることになる。それらを用いた撮影でアスリートのパフォーマンスをコンピュータ解析し、より科学的視点による構成内容の番組が今後は制作されるようになっていくと考えられる。

第 6 章 結論と課題

本研究では、1998 年以降に制作されたスポーツドキュメンタリーについて番組成立の背景と取材対象競技の傾向と決定要因・構成映像の特徴について分析をした。

1998 年にスポーツドキュメンタリーのレギュラー番組が始まった背景には、日々収録される撮影素材を報道としてのニュースだけに終わらせることなく、一つの素材をあたかも別の料理として出すようにマルチユースすることを考えて番組化を模索したことがあげられる。そして、オリンピックなどのビッグイベントや各局が中継・放映権を持つことにより生まれた、メディアスポーツとの強力な関係性が、取材対象となる競技・アスリートを決定する要因となっていることが明らかになった。また、民放においては特にスポンサーの要望として、スポーツそのものが持っている挑戦する姿勢やあきらめない心を表現することが要因となって取材対象が決定することも分かった。

国民に人気のスポーツは数多くドキュメンタリーとして取り上げられており、時代と共にその人気種目も変わっていったことが明らかになった。また、オリンピックやサッカーワールドカップなど世界大会が開かれる時にも、メディアスポーツが伝えてきた注目選手や競技に呼応するように多くのドキュメンタリーが制作されていくことが示された。

今後、試合映像の権利を主催者や放映権を持った放送局が保有することで、他局の制作に制限が生まれる可能性も出てきている。放映権が絡むことでアスリートたちをどのように取材し、物語を作り出していくのか。演出手法はすでに出尽くしたと考える制作者も多いが、撮影機材・記録媒体の小型化・デジタル化による映像記録は、これまで撮影できなかった様々な角度・時間の記録を可能にして来ており、それらを活用することで その時にしか撮影できない貴重な科学的要素を持ち得る映像が撮影され、それが新たなスポーツドキュメ

ンタリーとして、それぞれの競技が持つ意義や多様性を番組に昇華してくれると考える。

2020 年に開催される東京オリンピックに向けて、スポーツドキュメンタリーはこれからも数多く制作されることは明らかである。

しかしながら、本研究の研究対象である貴重な記録としての、過去のスポーツドキュメンタリー番組そのものを入手することは現状困難である。また番組制作の内情にまで踏み込むことはなかなか難しい状況でもあった。番組アーカイブの整備が進展しない状況で過去の番組視聴が難しい段階であることが、本研究の対象を限定的にした点は否めない。また、メディアスポーツとの強力な関連性が明らかになったが、放送の波、曜日、時間帯など視聴者に結び付くデータ、例えば視聴率などを活用することが出来ないままだったことは、今後の課題となる。

当研究では過去の番組を入手・視聴する機会が限られてはいたものの、貴重な発見や知見を得ることができた。今後はアーカイブスの整備・発展がもたらされ、更なる研究が進むことを期待する。今回は研究対象としなかったインターネットの動画共有サイトやネットメディアなどもアーカイブスに関連する放送と通信のインフラサイドからの発展要因として注目していく必要がある。放送された番組は公共の財産であり、その価値を分かち合うことが今後可能になれば、よりスポーツの発展に寄与することになると考える。

引用・参考文献

阿部 潔 (2009)『スポーツの魅惑とメディアの誘惑―身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』 世界思想社

「アスリートの魂」番組公式サイト バックナンバー

<http://www4.nhk.or.jp/tamashii/170/> 2018/6/10 最終閲覧

「バース・デイ」番組公式サイト バックナンバー <http://www.tbs.co.jp/birth-day/onair/>

2018/6/10 最終閲覧

萩元晴彦・村木良彦・今野勉 (1969)『お前はただの現在にすぎない

－ テレビになにが可能か』 田畑書店

橋本純一(2002)「現代メディアスポーツ論」 世界思想社

第 10 章メディアスポーツとグローバリゼーション

早川武彦 (2005)「“メディアスポーツ”その概念について―スポーツの本質にねざすメディアスポーツ論に向けて―」

石田佐恵子・山田富秋 (2014)『特集「映像アーカイブスを活用した質的調査の探求によせて」』 65 巻 4 号 p.454－464 社会学評論

伊藤 守 編 (2014)「テレビ番組アーカイブを活用した映像研究の可能性」65 巻 4 号 p.541－546 社会学評論

(2002)「メディア文化の権力作用」

「情熱大陸」番組公式サイト <https://www.mbs.jp/jounetsu/> 2018/6/10 最終閲覧

神原直幸 (2001)『メディアスポーツの視点 疑似環境の中のスポーツと人』学文社

文部科学省 (2017)『「スポーツ基本計画」第 2 章 中長期的なスポーツ政策の基本方針 p.5 2－(2)2 スポーツで「社会」を変える！』

森達也(2005)「ドキュメンタリーは嘘をつく」 草思社

森田浩之 (2009)『メディアスポーツ解体』 NHK 出版

引用・参考文献

中村直文 (2001) 「命運を決める一瞬 (とき)」 新・女子マラソン伝説 NHK出版

NHK クロニクル 番組表ヒストリー

<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/> 2018/6/10 最終閲覧

〃 公開ライブラリー 保存番組

<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/index2.html> 2018/6/10 最終閲覧

「NHK スペシャル」 番組公式サイト <http://www6.nhk.or.jp/special/index.html>
2018/6/10 最終閲覧

「人間解析ドキュメント ZONE」 TBS アーカイブ

<https://web.archive.org/web/20050909080745/http://www.tbs.co.jp/zone/onair/2004/index-j.html> 2018/6/10 最終閲覧

野々村博 岡本昌夫 福井孝明(2005)

「スポーツにおけるグローバリゼーションーラグビーフットボールにおける
グローバル化の現状ー」 大阪経大論集 第 55 巻第 6 号 p.29-46

シーラ・カーラン・バーナード (2003・2014: 日本特別編集版)

「ドキュメンタリー・ストーリーテリング」

クリエイティブ・ノンフィクションの作り方 フィルムアート社

杉本厚夫 (2005) 「映画に学ぶスポーツ社会学」 世界思想社

鈴木常恭 (2005) 『テレビ・ドキュメンタリーにおける表現の生成と変容についての一考察ー「物語るドキュメンタリー」と「物語らないドキュメンタリー」ー』 尚美学園大学芸術情報学部紀要 第 8 号 11-33

武田尚子 (2012) 「映像資料と社会調査方法ー初期テレビ・ドキュメンタリー『日本の素顔』の取材対象と方法ー」 武蔵大学総合研究所紀要 22 号 p.1-22

山際淳司(1980)「江夏の 21 球」 文芸春秋

山本夏生(2018)「テレビのバラエティ番組がスポーツ／スポーツ選手を取り込む過程とその理由：スポーツバラエティ番組の制作者の意図を中心に」

一橋大学スポーツ研究,37:37-52

引用・参考文献

- 吉田康伸(2003)「バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究」
法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 21, 23-26
- 吉見俊哉・土屋礼子 編 (2010)「大衆文化とメディア」 ミネルヴァ書房
- 第5章「聞くスポーツ」の離陸 山口誠
- 第13章 グローバル化するサッカー放送とその受容 有元健

謝辞

本稿を執筆するにあたり、非常に多くの方々のご協力やお力添えを頂きました。感謝申し上げます。指導教員の間野義之教授には、研究の方向性について貴重なご教示ご指導を賜りました。感謝申し上げます。また、副査を引き受けて頂きました中村好男先生、澤井和彦先生、舟橋弘晃先生には様々なご助言を頂き、感謝申し上げます。特に、舟橋先生におかれましては、先行研究や参考文献、そして論文の構成に関して細やかなご指導を頂きました。あらためてお礼申し上げます。

また、大学院スポーツ科学研究科においてご指導くださった先生方にもお礼申し上げます。

そしてで社会人修士としてともに時を過ごし、一人「残留」してしまった私にいつも温かい励ましの声をかけてくださった同期の皆さんには感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

最後に、、、予定を大幅に伸ばしたにもかかわらず、最後まで呆れることなく見守ってくれた家族に、最高の感謝を捧げます。